

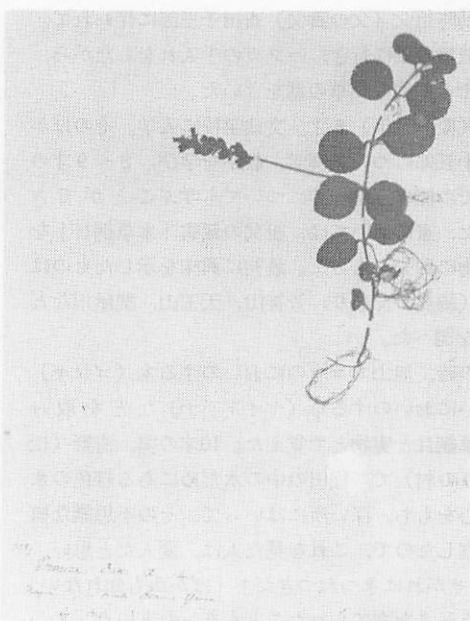
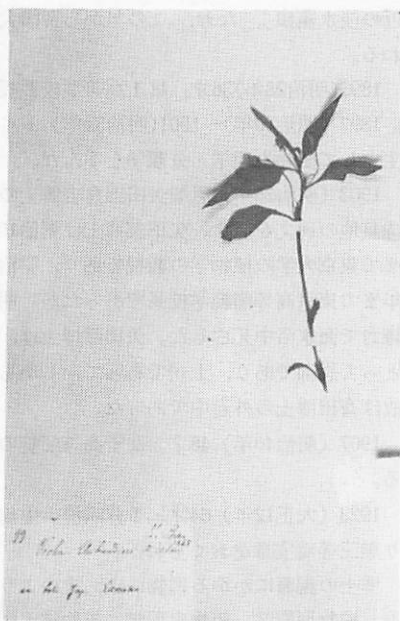


図22 バリ自然史博物館にあるタデスミレ(左)とグンバイツル(右)のタイプ標本

文 献

上野益三 (1973) 日本博物学史 平凡社.

—— (1973) 博物学史散歩その8 植物と文化
No. 8, 50~65.

—— (1974) 同 その9 同 No. 10, 44~59.

小泉源一 (1936) 日本植物の研究 植物分類, 地理
5: 1~26.

長野県植物研究者伝 2

齋 田 功太郎 抄伝

丸 山 利 雄

T. Maruyama: Biography of Dr. K. Saida

長野県出身の植物研究者として、田中芳男の次にあげなければならない学者は、齋田功太郎博士であろう。

齋田博士は、明治・大正の頃の植物に興味を持った青少年には、その著「最新図説内外植物誌」のために、牧野富太郎先生とならんでその名が知られた学者であった。また、東京大学の最初の植物専攻の卒業生であり、わが国はじめての論文提出による植物専門の理学博士でもあった。

齋田功太郎については、平凡社の大人名事典に、次のように書かれている。

「サイダコータロー 齋田功太郎 (1859—1924) 明治大正時代の植物学者。安政6年12月15日に信州松代に生る。少年時代は殆んど学業に就かず樵夫に伍し、田野を耕し、或は木版彫刻を習って生計の一助とした

が、17才東京に出て訓蒙学舎に学び、のち大学予備門の前身官立英語学校に入り、14年卒業し、次いで帝大理科大学地質学科に入り、のち転じて植物科第1回卒業生として出た。19年東京高等師範学校教授嘱託。翌年教授となった。大正13年没。年66。小植物学、大日本植物誌、内外普通植物誌下等植物篇の著があり、佐藤礼介氏と共著の最新図説内外植物誌がある。」

以上の記述のうち、他の文献と著しく異なるものは、少年時代の記述であり、その他にもいくつかの異なる点があるが、そのいずれが正しいかは、確かめることができなかったものが多い。

以下、大人名事典以外の文献によって、年を追ってその事績をあげてみると、次のようである。

1859 (安政6年) 12月、松代藩士齋田虎尾の長男として松代で出生。父は藩校文武学校の文学の先生であ

った。幼時祖父（父の養父）斎田千三郎に伴われて、ハツカ栽培の畑に行き、ハツカの手入れをしながら、ハツカやその他の薬草の話をきいた。

1865（慶応元年）6才。文武学校に入学。そのほか竹内八十五郎について漢学、数学を学び、8～9才の頃はすでに開平、開立等についても学ぶことができた。また、家においては、祖父の蔵書「本草綱目」を見て植物に興味をもった。最初に興味を示したものはメンマ（綿馬）であり、皆神山、天王山、関屋川などの植物を調べた。

9才の時、旭山でゴマのにおいのする木（ゴマギ）やわるいにおいのする草（ヤイトバナ）などを取って、本草綱目と実物とで覚えた。10才の頃、清野（松代の隣の村）で、稲田の中の水だめにある緑色の水藻に関心をもち、深い所にはいって、その不思議な植物を観察したので、これを見た人は、変人だと思い、「斎田のせがれはきつねつきだ」「ばかかも知れない」などのうわさを立てられたこともあったという。

1874（明治7年）15才。父が茨城の裁判所判事となったので、父と共に上京し、中村敏学の同人社（当時福沢諭吉の慶応義塾や辻新次の訓蒙学舎などとならぶ私塾、大人名事典では訓蒙学舎に入舎となっている。）に入る。

1878（明治11年）19才。大学予備門の前身である東京英語学校に入る。

1881（明治14年）22才。英語学校を卒業し、東京大学理学部植物学科に入学。（大人名事典には帝大理科大学となっているが、帝大は帝国大学令が明治19年に施行されてからや呼び名であるので、東京大学が正しい。）大学における主任教授は、大学創設以来の植物学の主任教授である矢田部良吉博士（1851～1899）であった。

1885（明治18年）26才。東京大学卒業（植物学科としては第1回の1人だけの卒業生であった。）卒業論文は「東京及び附近の羊歯類」。続いて大学院に在学。この年7月17日より8月1日まで矢田部教授。松村任三、内山富次郎等の指導による日光方面の植物採集の会があり、同行者は大学院生斎田功太郎、4年生白井光太郎、大谷津直麿、3年生拓植千嘉衛、1年生三好学、渡瀬庄三郎等であった。

1886（明治19年）27才。東京師範学校が東京高等師範学校となり、大学院在学のまま高等師範学校教授嘱託となる。1887（明治20年）28才。大学院を卒業し、高等師範学校教授となる。

1891（明治24年）32才。学位取得。はじめての論文提出理学博士がこの年3名あり、そのうち植物が1人で、それが斎田博士であった。学位論文「東京及び附

近の淡水藻類」。なお、この年から帝国大学講師を兼ねる。

1895（明治28年）36才。第1高等学校教授を兼ねる。

1897（明治30年）～1901（明治34年）ドイツへ留学。主として植物生理学・分類学を学んだ。

1903（明治36年）恩師矢田部良吉博士の谷中・天王寺墓地の碑文を撰す。矢田部博士は明治10年から31年まで東京大学の植物学の教授であり、明治31年から32年まで東京高等師範学校長であったが、明治32年8月鎌倉で海水浴中死亡した。矢田部博士は、斎田博士にとって恩師であり、上司であって、しかもその死亡事故は斎田博士の外遊中であつた。

1907（明治40年）48才。女子高等師範の教授も兼ねる。

1923（大正12年）64才。1月病没。生前の功績により勲三等瑞宝章をおくられる。

博士の編著にかかる書物には、次のようなものがある。植物形態学、植物生理学、植物学入門、新式植物学、Elementary Textbook of Botany、植物学字彙（大久保三郎・染谷徳五郎と共編）、中等教科植物学、中等教科応用植物学、生理衛生学、大日本普通植物誌、博物教科書植物界、中等植物教科書、師範用植物教科書、新撰植物学、新撰生理衛生教科書、近世植物学教科書、内外実用植物図説、参考植物学辭義、普通植物教科書、内外普通植物誌、最新図説内外植物誌（佐藤礼介と共著）。

なお博士の発見になる植物で、その名を学名にとめているものにヤマヤナギ（*Salix saidaeana* Seem. 1903年）や紅藻類イバラノリ科のサイダイバラノリ（*Hypnea saidana* Holmes）などがある。

博士はまた、まれにみる人格者で、特に学生の指導にすぐれた業績を示し、高等師範の学生からは「斎田聖人」と呼ばれ、親しみと尊敬をうけていたという。長野県の明治・大正期の動物学、植物学方面の指導者であった矢沢米三郎は、高等師範学校在学中この斎田博士の指導をうけた人である。

参考文献

平凡社 大人名事典、田島清編 信州人物誌、更級・埴科教育会編 更級郡・埴科郡人名辞書、大平喜間多編 松代町誌下巻、上野益三著 日本博物学史、東京都編 東京教育史資料大系第1巻、東京大学編 東京帝国大学五十年史上巻、松代小学校編 松代学校人物伝上巻、日本科学史学会編 日本科学技術史大系8巻・15巻、信濃教育会編 信濃教育564号 矢沢米三郎著 信濃博物研究家。